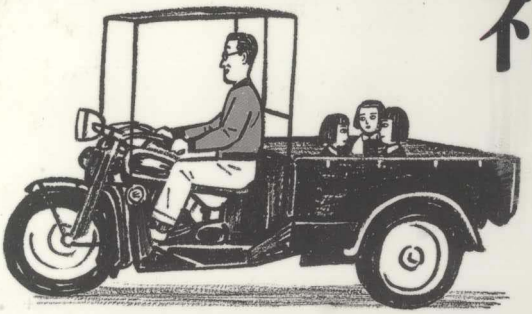
てるてる坊主の照子さん 上

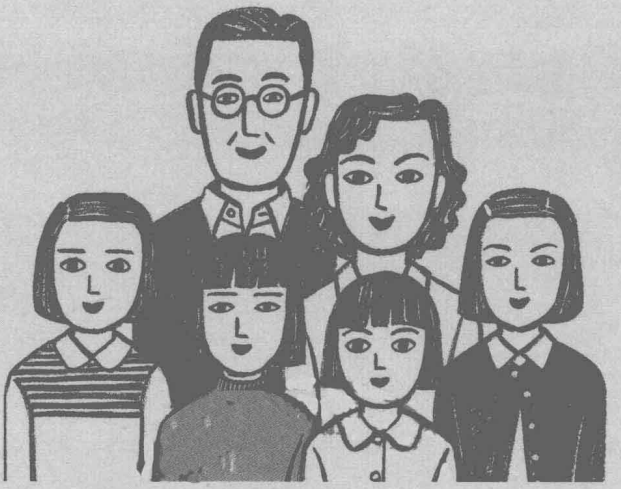
なかにし礼



新潮社

てるてる坊主の照子さん 上

なかにし礼



新潮社

てるてる坊主の照子さん　上巻

二〇〇二年七月二〇日　発行

著者　なかにし礼

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社　新潮社

〒162-8711　東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部　〇三-三二六六-五四一一
読者係　〇三-三二六六-五一一一

印刷所　二光印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Rei Nakanishi 2002, Printed in Japan

ISBN4-10-445103-7　C0093

てるてる坊主の照子さん・上巻▼目次

年中無休　5
雨のち曇り　45
あかんたれ　73
一から出直し　95
今がチャンス　129
未知との遭遇　167
めまい　229
チャンスのあとにピンチあり　275

下巻▼目次

お先まっ暗
てんやわんや
雨降りお月さん
ひとすじの光
本日は晴天なり
おまけ
あとがき

挿画　峰岸　達
装幀　新潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

てるてる坊主の照子さん　上巻

進化しようとする人だけが進化するということは真実なのである。……（略）
人間を自由ならしめているのは、人間を上へ上へと駆りたて、したがって、人間が選択をせまられたときに理由を提供してくれる進化要求にほかならない。

コリン・ウィルソン『賢者の石』（中村保男訳・創元推理文庫）

年中無休

私には大晦日にやる秘密の儀式がある。
みんながテレビの『紅白歌合戦』に夢中になっているすきに、倉庫へ忍び込み、正月のために用意したお節料理をつまみ食いすることである。なぜなら、私は好き嫌いが激しく、明日になると、好物が先に食べられてしまう恐れがあるからだ。
私の好物、それは卵焼きと栗金とん。私は黄色いものが好きらしい。
倉庫の板戸をこっそり開け、薄暗がりの中で踏み台を探す。それを天井からぶら下がっている裸電球の下へもっていき、よっこらしょと踏み台に上がり、スイッチをひねる。
すると、あるある。いつもの場所にお節料理の重箱が四組、きらきらと厳(おごそ)かに輝いている。
踏み台を下りた私は、一番左側の重箱の蓋(ふた)をおもむろに開ける。
去年は、子供の浅知恵で、一つのお重からせっせと好物を食べたものだから、卵焼きと栗金とんのところに穴ぼこが開いてしまった。翌日、おかあちゃんがお重を開けた時には、すぐに私のしわざとばれてしまい、こっぴどく叱(しか)られたものだった。
今年こそは完全犯罪をめざして、全部のお重から一口ずつ満遍なくつまみ食いをしよう。
この倉庫は保存庫なので、凍えるように寒い。けど、親指と人差し指でつまんだ栗金とんを頬(ほお)

張った時の幸せといったらない。

「ああ、おいしいわぁ」

今この時、この倉庫にある卵焼きと栗金とんはすべて私のもの。まさに至福の時である。

うちのテレビの音なのか近所のものかは分からないけれど、遠くのほうから歌が流れてくる。江利チエミの『ヤムミー・ヤムミー』だ。江利チエミは好きだけど、そんなことを言っている場合ではない。私はつまみ食いに集中する。歌なんか聞こえなくなってしまう。

二つ目のお重にとりかかった時、母屋のほうからおかあちゃんの声がする。

「冬子、どこにいんねん。はよせんと紅白終わってしまうで」

この声を聞いた瞬間、寒い倉庫の中で私は汗びっしょりになった。

冬子、それは私の名前だ。

夢心地から覚めた私はあわてふためき、未練を残しながら犯行現場から立ち去る。

うちの商売は喫茶店と製パン屋で、屋号は「シャトー」。

大阪は池田駅前の、唯一の繁華街である栄町商店街のなかほどにある。道路に面したところに喫茶店、それにパンとケーキの小売り店舗があり、奥に製パン工場がある。二階が住居で、家族と店員さんたちが住んでいる。

お便所は、例の倉庫よりももっと奥の別棟にある。いわば外で、電気は暗いわ、あっちこっち蜘蛛の巣だらけで、時たま大きな蜘蛛が足下を走りぬけるわで、落ち着いてしゃがむことができない。

汲(く)み取り口の横には大きな柿の木とびわの木があって、季節になると美味(おい)しそうな実がなるけれど、私はどうしても食べる気になれない。

お風呂もまた別棟で、五右衛門風呂である。丸い板が浮いていて、その板を足で踏むようにして、上手(うま)い具合にお湯の底に沈めないといけない。おまけに、体がじかに風呂釜に触れようものなら火傷(やけど)をすることさえある。

私はこの家のお便所とお風呂が嫌いだ。

そんなことはどうでもええねんけど……。

私が息せききって店に戻ると、みんなが一斉にこっちを見る。去年のことがあるから。

思わず私は口走ってしまう。

「倉庫なんか行ってへんで」

手の甲で口をぬぐう。

「冬子、ちょっとこっちおいで」

おかあちゃんが私を呼び寄せる。

私は、おずおずと近づいていく。

「ちょっと口開けてみい」

首を横にふり、口を一文字に結んで私は抵抗する。

おかあちゃんに鼻をつままれる。

苦しくなって口を開ける。

「ほら、見てみい。歯の間に栗のかすがついてるやんか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

おかあちゃんが言うと、姉たちは、
「おーこられやった。おーこられやった」
とはやしたてる。
おとうちゃんからは、
「またばれたんかいな。アホやな」
と笑われる。
よし、来年こそ完全犯罪を、と私は決心する。
こんな具合やから、私はみんなから、しゃべくりや、いちびりや、と言われている。言われついでやさかい、わが家のことを洗いざらい話してみましょかあ。へっへっへ……。
父の名は岩田春男、大正十一年生まれの三十五歳。ひどい近視で丸い眼鏡をかけている。背は高いが、顔は十人並だ。
母の名は照子、大正十三年生まれの三十三歳。子供の口から言うのもなんだけど、まあまあの別嬪（べっぴん）さんだと思う。
子供は女ばかりで、十一歳の春子を筆頭に夏子、秋子、冬子の四人。
春、夏、秋、冬とそろっているのは偶然で、最初の娘が春三月に生まれ、おとうちゃんの名前が春男だったから春子とつけたまでのこと。そしてそのあとの子供たちが、まるで神様のいたずらみたいに、上手い具合に季節の順を追って生まれたからこういう具合になった。
で、私の名前は冬子、四人姉妹の末っ子である。大阪でいうところのこいさんやけど、そんなええとこの子ともちゃうしなあ……。

男の子に恵まれなかったことについては、
「男も女も一緒や」
父も母も意に介していないようだった。
が、岩田の家にはヨネという名の厳しい姑がいて、この姑だけは、
「長男の嫁が跡継ぎを産まんようじゃ、なんのために来たのか分からへん」
と一時は愚痴っていた。
最近ではどうやらあきらめたらしい。
いかに姑が厳しくあたっても、嫁の照子は、楽天家なのか間抜けなのか見当がつかないほどに明るく振る舞うものだから、気抜けしたのだろう。
その照子さんが言った。
「さあ、年越しうどん食べようか」
わが家では、年越しに食べるのはなぜか蕎麦ではなくて鍋焼きうどんである。これは九州出身である照子さんの好みのせいかもしれない。
とは言っても照子さんが作るわけではない。近所のうどん屋の出前である。家族の数が七人で、住み込みの従業員が十二人いるから、十九個も頼む。
十九人が、年に一度の出前ものを、喫茶の店舗でふうふう言いながら食べる。
私も、美味しくてたまらないのだが、なにしろついさっき倉庫で栗金とんをたらふく食べたものだから、思うように入らない。
「損してしもうた」

そう思いつつ母を見ると、母の照子さんは、ほれ見たことかと言わんばかりに、私を見てくすりと笑った。

年越しの鍋焼きうどんを食べ終える頃、照子さんが突然大きな声を出した。

「あっ、しもうた。湯たんぽ入れるの忘れてた。早ようお湯を沸かさなあかん」

その声を聞くと、

「おお、こりゃ大変や」

古くからうちにいるねえやさんはあわてて口の中にうどんを押し込み、熱いおつゆをごくりと飲み込んで炊事場へ立った。

一口に湯たんぽといっても十九人前の湯たんぽである。お湯の量もはんぱではない。二つの竈(かまど)で二つの大釜にお湯を沸かし、それを柄杓(ひしゃく)ですくって各自の湯たんぽに入れるのだ。

寝る準備のあわただしい空気の中で私は思う。眠くて眠くて仕方ないのだけれど、鍋焼きうどんを食べたばかりで、体がほてっているものだからなおさらだ。

〈もうちょっと起きていたいわ。湯たんぽなんかいらんのに〉

テレビもラジオも消してしまっているけど、あちらこちらのお寺から除夜の鐘が流れてくる。

それを聞きながら、

〈年越しってええなあ〉

と私は物思いにひたる。

が、家族のものや従業員たちはうどんの鍋を手早く洗い、重ねて炊事場の隅に置き、一人ずつ自分の湯たんぽを抱えて二階に上がっていく。

「ほな、お休みなさい」
そんな声が木霊のように聞こえる。
「ゆっくり寝ときや」
と言う照子さんの声も木霊する。
明日の元日は、年に一度、朝寝のできる日なのだ。だからみんな寝ることに必死だ。
ぼんやりしているのは私一人。
「冬子、早よ二階行って寝なさい。電気消すで」
もっと大晦日が長かったらええのになあと思いつつ、湯たんぽを抱えて私も階段を上がる。
父の部屋からは鼾が聞こえる。
私は姉の秋子と同じ部屋で、同じ布団で寝る。普通より少し大きめにできてはいるけれど毎晩、毛布と掛け布団のとりっこをする。朝になるとたいてい私は湯たんぽを抱えている。
だけど今夜は心も体もあたたかいから、布団に入って秋子ねえちゃんの背中に抱きつくように寄り添い、
〈気持ええなあ〉
と思った瞬間寝てしまった。

あまりの静けさに目が覚める。
空気が違う。毎朝鼻にからみつく、パンやケーキの甘い匂いがしない。御飯の炊ける匂いや薪の燃える匂いがしない。

うちのパン工場は毎年、大晦日と正月三が日は休みだ。クリスマス・ケーキの販売が終わった翌日から「賃餅承ります」の看板を出して餅つきも商売にしている。が、それも終わった。喫茶店「シャトー」は年中無休だけれど、元日は午後からだ。

静かだ。隣の部屋から父の鼾が聞こえる。

いつもなら夜中の三時に起きだし、パン作りに取り掛かる父が寝ている。不思議だ。母の寝息も聞こえる。

目覚まし時計を見ると、朝の八時。

「ひゃあ、静かやなあ。静かすぎて寝るのもったいないわ」

パン工場の音がない。小麦粉を練る機械の音がない。人が何人も入れそうな大きなパン焼き機のガスの燃える音がない。つけっぱなしのラジオの音がない。パン職人たちの掛け声が聞こえない。そのうえ、駅前商店街のすべての店が閉まっている。

この静けさは私の祭りだ。

私は浮き浮きとした気持で布団を抜け出し、常着の洋服を着、こっそり母のハイヒールをはいて外へ出た。ハイヒールはぶかぶかで歩きにくいけど、大人の気分になるための必需品だ。

南北に走っている商店街は人っ子一人いない。

どの店も板戸を閉め切っている。

駅の横の踏切りまで見通せる。

独り舞台だ。

私は大好きな江利チエミの真似をする。

といってとりたてて歌の文句は知らないのだけれど、右手はマイクを持つ手つき、左手は観客から投げられたテープを握る手つきで、でたらめに歌い踊る。

ララララララ……。

ポーズを決めてニッコリ笑い、観衆の喝采に応えて深々とお辞儀をする。

その時、おかあちゃんの声がした。

「冬子、寒いから、これはかな、おなかこわすよ」

白い息を吐き肩をすぼめている母の手には、私のために編んでくれた黄色と青の横縞の毛糸のパンツが揺れていた。

私は現実に引きもどされ、がっくりする。

あの毛糸のパンツ嫌いやねん。

おかあちゃんの声が一段と大きくなる。

「なにしてるの、私のハイヒールはいて。足痛めるし靴も傷むやんか」

「なあ、おかあちゃん、静かやなあ。気持ええなあ」

「ほんまやなあ。正月ぐらいやなあ。そやけど寒いから家入ろう」

おかあちゃんは私を抱き上げ、ハイヒールを手に持つ。

最後におかあちゃんに抱かれたのはいつだったろう。あまりに遠い昔のことで上手く思い出せない。

照子さんは忙しすぎるんや。

でも今は、私一人のものや。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com